

2011年度道南日本海のスルメイカ漁況

道総研函館水産試験場 調査研究部 研究主任 澤村 正幸

【はじめに】

スルメイカは日本列島に沿った大規模な回遊を行う魚種であり、各地の漁況はその年の資源量のほか海況による回遊経路の変化によっても影響を受ける。道南日本海で漁獲の中心となるのは、主に山陰から九州の北の海域で9月以降に発生し、日本海を北上・南下する秋生まれ群である。本発表では2011年度の道南日本海におけるスルメイカ漁況のまとめと、その背景にある環境的な要因についての考察を行う。

【2011年の漁況のまとめ】

漁期前の5月に秋田沖から松前沖にかけての日本海で実施した調査船調査では、海域全体の平均CPUE（自動イカ釣り機1台1時間あたり漁獲尾数）は2001年以降で最も低い値となり、特に例年高い分布密度を示す南側の点でCPUEが低かった。

檜山管内（八雲町熊石地区を含む）の月別漁獲量は漁期前半の7～8月を中心に前年を上回り、通年で前年から14%の増加となった。松前港での旬別水揚量は、漁期開始直後の低迷の後、7～8月に前年及び平年を上回ったが、漁期後半はほぼ一貫して前年を下回る値となり、通年では前年の25%増であった。函館港での旬別水揚げ量は7月に前年及び平年を上回ったが、夏季の漁獲の落ち込みと秋期の南下群の来遊の遅れにより、通年では不漁の前年から3%の増加に止まった。函館港の魚体サイズはおおむね前年及び平年並みの値で推移した。

【考察】

2011年度の漁期開始直後の漁獲の低迷は、この時期の低水温により群の北上が遅れたことによるものと考えられる。その後漁獲は上向き、夏場にかけて例年及び2010年を上回る漁獲が続いたが、日本海全体の資源量自体はそれほど多くなかったと考えられ、沖合に水温の低い海域があったことで北上群の回遊経路が岸寄りとなり、沿岸近くに漁場が形成されたことが漁獲量の増加につながったと思われる。

全道的な漁況としては、2010年に続き、夏から秋にかけてオホーツク海沿岸で豊漁となる一方、道南太平洋海域では夏以降に漁獲量が伸び悩み、漁期後半の漁獲のピークは漁期終盤近くの短い期間となった。これは、夏季の高水温の影響で回遊の範囲が北に延びたことにより太平洋からオホーツク海への移動が増えた一方、秋以降に道南太平洋に来遊する太平洋側の群の南下が遅れたためと考えられる。

道南海域全体の近年の傾向として、漁期開始直後の北上群の来遊の遅れと、漁獲のピークが漁期前半から漁期後半へと移動し、漁期後半の盛漁期も遅くなっていることがあげられる。このうち北上群の来遊の遅れは、短期的には北上期に低水温となる年が多かったためと思われるが、長期的には夏から秋の高水温による南下の遅れに伴う産卵期・発生時期の遅れが影響しており、オホーツク海での豊漁や漁獲のピークの変化とも間接的に関連があると考えられる。